

秋思しゅうし
(許渾きよこん)

琪樹きじゆの 西風せいふう 枕簟ちんでんの 秋あき

楚雲そうん 湘水しやうすい 同遊どうゆうを 憶おもう

高歌こうかう 一曲いつきよく 明鏡めいきやうを 掩おほう

昨日さくじつは 少年しやうねん 今いまは 白頭はくとう

琪樹西風枕簟秋 楚雲湘水憶同遊
高歌一曲掩明鏡 昨日少年今白頭

解説 秋に感じて、楚山そざん湘水しやうすいの間を行遊したことを思い、自分の老衰を嘆じた詩。

語釈 ※秋思Ⅱ樂府の一題。秋のものの思い。普通は女性が秋に夫、恋人を思う気持を詠ずるのを主題とする。この詩は作者が自分の老衰を嘆じてうたったものである。※琪樹Ⅱここは庭の木を美しくいったもの。※西風Ⅱ秋風。※枕簟Ⅱ枕と、竹であんだむしろ。寝具をいう。※楚雲湘水Ⅱ楚山の雲、湘江の水で、楚山湘水のあたりを行遊したと。※高歌Ⅱ円高らかに歌うこと。※掩明鏡Ⅱ自分の老衰した顔を見るに忍びず、すぐ鏡を掩いかくしたと。

通釈 美しい庭の大木に秋風が立ち、枕や、むしろが冷やかなものと感ずる秋。昔、楚山、湘水のあたりを一緒に遊んだ人を思い出す。思わず声高らかに一曲を歌い、歌い終わって鏡をおおいかくした。ああ昨日までの紅顔の美少年は、今はもう白髪の老人になってしまった。